『梅光言語文化研究』第6号（2015年）pp.52・71
@ 2015年　梅光学院大学国際言語文化学会

James Joyce の "The Dead" から聞こえてくる「暗闇にかそけく降りしきる雪の音」

― 「ケルト的アイルランド性」に関する一考察 ―

吉　津　成　久

Abstract: As in many of *Dubliners* stories written by James Joyce, but in "The Dead" most of all, the protagonist's epiphany is of great significance. According to Joyce, a perception of the ordinary is changed into the extraordinary and significant. For instance, a trifling dialogue between the citizens suddenly signifies a profound and significant meaning to a listener. 'Epiphany' is his chosen word for such moments of vision borrowed from the Catholic tradition in which he was educated. The protagonist Gabriel Conroy in "The Dead" experiences the epiphany at the ending of the story. Gazing at his wife Gretta asleep after her confession of her grief over the loss of her young lover in her girlhood and hearing the snow falling faintly and faintly falling in darkness, Gabriel becomes conscious of setting out on his journey westward, "that region where dwell the vast hosts of the dead." This climactic epiphany suggests the coexistence of the living and the dead, their strange association with each other. This paper proceeds to discuss this striking feature of the idea about life and death in "Celtic Irishness."

Keywords: "The Dead"　all becoming shades　the snow falling softly and faintly in darkness　the journey westward and toward epiphany

1．はじめに

James Joyce の 短編小説集 *Dubliners*（『ダブリン市民』）に収められた作品の多くにおいて、とりわけ最後の "The Dead"（「死せる人たち」）において、主人公が経験する「エピファニー」(epiphany) が重要な意味をもってくる。ジョイスによれば、ごくありふれた日常的なものに対する認識が非日常的な重要なものに変化する瞬間の精神的啓示を自分が受けたカトリック教育の伝統から借りた言葉として 'epiphany'（顕現）と呼ぶ。"The Dead" の主人公ゲイブリエル・コンロイは、物語の最後においてこの epiphany を経験

する。妻グレタから、アイルランドの西の都ゴールウエイの少女時代に愛し合った少年との想い出とその早すぎる死の悲しみを告白されたゲイブリエルは、暗闇の中で生者にも死者にも降り注ぐかそけき雪の音を聞きながら、彼の意識は死者の憩う西方へ赴き、「かそかな」死の世界の住人から、現実に生きる自分の誇りや欲情をはるかに超えて真実に生きることのあり様を啓示される。主人公の「魂の死と再生」の瞬間である。本稿は、このジョイスの "The Dead" を主要な拠り所として、「人生の最後」('the last end,'「暗闇」や「影」が象徴する）を心に留めながら生きるという「ケルト的アイルランド性」の顕著な特徴について論考をすすめるものである。

２．西方への出発 (Setting out on a journey westward)

時は１９０４年、ダブリン在住の未婚の老叔母姉妹主催による恒例のクリスマス・パーティに妻グレタと共に出席した大学講師ゲイブリエル・コンロイは、パーティー終了後、ホテルに入って、妻からかってゴールウエイの少女時代愛しあったマイケル・フューリー少年の事を告白される。マイケルは妻グレタがダブリンに来て間もなく結核のため１７歳で夭折する。告白のきっかけになったのは、パーティーが終わって妻より先に玄関で帰り支度をしていたゲイブリエルが目にした妻の姿であった。階上から流れてくる「オーグリムの乙女」というアイリッシュ・バラードを階段途中で聴いている妻グレタの頬に涙がつたわっている。早く妻と二人きりになりたいゲイブリエルは、ホテルの部屋に入って、なぜ物思いに沈むのか妻グレタに尋ねる。実はその歌はマイケル少年が好んだ歌で、それが彼女に遠い過去におけるマイケル少年との思い出にタイムスリップさせる。マイケルは、グレタがゴールウエイを去る前夜、雨にうたれながら、彼女に最後の別れをしに来る。体に悪いから家に帰るようにグレタが言うが、彼は「もう生きたくない」という。その後、彼の死をグレタはダブリンで知る。ゲイブリエルが何が原因でマイケルは死んだのかと聞くと、グレタは「あたしのために死んだの」という。泣いて泣いて告白したグレタはやがてベッドの上に身を投げ、その寝顔は子供のそれのようである。ゲイブリエルはその寝顔を見ているうちに惜しみない涙が流れてくる。これが今までに感じたことのない本当の愛だろうかと考える。そのうち、窓の外に降り続ける雪を眺める。雪に誘われるように、ゲイブリエルの意識はアイルランドの東から次第に西へ旅をつづけ、妻グレタのかっての恋人マイケル・フューリーが眠る墓地に至るが、生者にも死者にもあまねく「かそけくも」降り続く雪の音を聞きながら、彼の意識はゆっくりと遠のいていく。

It had begun to snow again.....The time had come for him to set out on his journey westward. Yes, the newspapers were right: snow was general all over Ireland. It was falling on every part of the dark central plain, on the treeless hills, falling softly upon the Bog of Allen and, further westward, softly falling into the dark mutinous Shannon waves. It was falling, too, upon every part of the lonely churchyard on the hill where Michael Furey lay buried..... His soul swooned slowly as he heard the snow falling faintly through the universe and faintly falling, like the descent of their last end, upon all the living and the dead. (James Joyce: *Dubliners*, A Triad Grafton Book, P.255. 下線は筆者による)

(また雪が降り始めていた。..... 西方への出発の時が来ている。そうだ、新聞の予報通りだ、アイルランドくまなく雪なんだ。雪は黒い中央平野のいたるところに、樹のない丘の上に、アレンの沼地にやさしく降りかかり (falling softly)、はるか西方では、暗い荒々しいシャノン河の波の上にもやさしく降り落ちている (softly falling)。マイケル・フューリーが葬られている丘の上のさびしい教会墓地のすみずみにもまた降っている。.....彼の魂はゆっくりと意識を失っていった (His soul swooned slowly)。雪が天地万物をこめてかそけく降りかかり (snow falling faintly)、それらの最後が到来した如く、なべての生けるものと死せるものの上に、かそけくも降りかかる (faintly falling) 雪の音を聞きながら。)

この場面で特に注目すべきは、英語句の音声効果である。それは、まずｓとｆを連続的に重ねる頭韻 (alliteration) 効果である。softly, soul, swooned, slowly, snow そして falling faintly である。そして、もう一つは、降雪状況を表す言葉を反転させ繰り返すことで、それは、falling softly, softly falling および falling faintly, faintly falling である。また、これらの語の中には意味の上で相関関係にあるものがある。例えば、softly と faintly は雪の降るさま（音）が「やさしく」、「かそけく」といったように同義であり、また、swoon と faint は「気が遠くなる」という同義的意味を持っている。

ゲイブリエルとグレタは夫婦になって２０年くらいたっている。ホテルの部屋に入った夫ゲイブリエルはロマンティックな気分になり、妻を抱きたくなる。結婚前のある春の朝、自分に宛てたグレタからの最初の手紙を撫でたように、今温かく湿った妻の手を愛撫し続ける。だが、グレタの「マイケルはあたしのために死んだと思うわ」(“I think

he died for me.") の一言で、ゲイブリエルの意識は、突然「かそかな」死の世界に力を集めて彼に向かってくる死者に直面させられる。

> A vague terror seized Gabriel at this answer as if, at that hour when he had hoped to triumph, some impalpable and vindictive being was coming against him, gathering forces against him in its vague world.
>
> (*Dubliners*, P.252)
>
> (その答えに、漠然とした恐怖の念がゲイブリエルを捉えた。それはあたかも彼が勝利を期している間際に、何か得体のしれない、復讐心を持ったものが自分に抗して、そのかそけき世界に力を集め、彼に向かってくるかのようであった。)

マイケル少年がグレタに出会わず、ただ静かに結核の療養につとめていればもう少し生きながらえたかもしれない。雨が降りしきる中「僕はもう生きたくない」と絶叫したように、グレタへの純粋でひたむきな愛が、彼女と別れるくらいなら死んでしまう方がいいと叫ばせたのであろう。ゲイブリエルは妻の「マイケルはあたしのために死んだと思うわ」という一言を耳にした瞬間、妻への欲情が消え、妻には自分の知らない清らかな恋があったことを認識し、自分が妻にとっていったい何だったのだろうと述懐する。泣きながら告白して、ぐっすり寝込んだ子供のような妻の寝顔を見ながら、ゲイブリエルはその心中をのぞかせる。「グレタがもはや美しくないと自分に言い聞かせたくはなかったけど、もはやマイケル・フューリーが死を賭してまでも求めた顔ではないことはわかっていた」。(He did not like to say even to himself that her face was no longer beautiful but he knew that it was no longer the face for which Michael Furey had braved death.) 今ゲイブリエルの胸に去来するのは、誇りを消されたという悔しい想いでもなく、嫉妬でもない。彼の思いを代弁すると、「そうか、グレタ、お前と俺だけじゃなかったのか、二人の間にはそういう男の子が精神的に存在したのか」ということになろうか。そのことは消去できない、入り込めないことで、そのまま受け入れるということであろう。「かそかな」死の世界の住人が現実に生きる人間に個人の悩みや誇りや欲情をはるかに越えて真実に生きることのあり様を啓示したのである。ゲイブリエルの意識に、自己という軸を離れて他者を温かい共感をもって包み込む時が来ている。つまり、人生変革の時が来ている。「西方への旅に出発する時が来ている」と内的独白するゲイブリエルに「魂の死と再生」の時が訪れているのである。

3．「はるかな、かそけき音楽」(Distant Music)

既述の通り、この最後のゲイブリエル回心を導くきっかけになったのは、パーティーが終わってホテルに向かうため帰り支度をしていたゲイブリエルが階段の途中にたたずむ妻の姿を見た時であった。ここにその場面を引用する。

Gabriel had not gone to the door with the others. He was in a dark part of the hall gazing up the staircase. A woman was standing near the top of the first flight, in the shadow also. He could not see her face but he could see the terra-cotta and salmon-pink panels of her skirt which the shadow made appear black and white. It was his wife. She was leaning on the banisters, listening to something. Gabriel was surprised at her stillness and strained his ear to listen also. But he could hear little save the noise of laughter and dispute on the front steps, a few chords struck on the piano and a few notes of a man's voice singing.

He stood still in the gloom of the hall, trying to catch the air that the voice was singing and gazing up at his wife. There was grace and mystery in her attitude as if she were a symbol of something. He asked himself what is a woman standing on the stairs in the shadow, listening to distant music, a symbol of. If he were a painter he would paint her in that attitude. Her blue felt hat would show off the bronze of her hair against the darkness and the dark panels of her skirt would show off the light ones. *Distant Music* he would call the picture if he were a painter. (*Dubliners*, PP.239-240、下線は筆者による)

（ゲイブリエルは連中と共に玄関口へは出なかった。じっと階段を仰いだまま玄関の暗がりにいた。一人の女が最初の踊り場あたりに、これも影にひそみ佇んでいた。その姿は見えなかったが、影が白と黒にみせている彼女のスカートの赤土焼色（テラコッタ）とサーモン・ピンクの縫い飾りがみとめられた。それは妻だった。彼女は手すりに寄りかかって、何かに聴きとれていた。ゲイブリエルはその静けさに打たれて、自分もまた聴こうと耳をそばだてた。しかし、表の階段に起こる笑声と言い合いの騒音以外、ほとんど聞き取れないのだった。ただピアノにひびくきれぎれの階音と、男性の声が唄うきれぎれの音調と……彼は玄関のうす暗がりにじっと佇み、その声が唄う曲を聞き取ろうとしながら、

下から妻の姿を眺めた。彼女の姿態には、あたかも何かの象徴であるかのような、優雅さと神秘さがあった。階段の上で影にひそみ佇んで、はるかな音楽に聴き入っている女はいかなるものの象徴であろうか、と彼は自分に問うてみた。もし自分が画家であったなら、あの姿態で彼女を描きたい。その青いフェルト帽は暗闇に彼女の髪のブロンズ色を浮き上がらせ、また、そのスカートの暗色の縫い飾りが明色の方を浮き上がらせるようにするだろう。「はるかな、かそけき音楽」、もし自分が画家だったら、その絵をこう名付けよう。)

階上から流れてくる「オーグリムの乙女」というアイリッシュ・バラードの歌声を聴きながら妻が涙を流していた。彼はその姿を妻グレタとしないで「一人の女」としている。「一人の女が最初の踊り場あたりに、これも影にひそみ佇んでいた」。(A woman was standing near the top of the first flight, in the shadow also.) その姿は彼には見えなかったが、身に付けているスカートの縫い飾りから妻だと判断する。何かの象徴であるかのような優雅さと神秘さをたたえたその姿をもし自分が画家だったら絵に描きたいと思う。そして、その絵を「はるかな、かそけき音楽」(Distant Music) と名付けようと考える。distant には、1.（距離が）遠い、（時間が）遠い、昔の、 2.（音が）かす（そ）かな、3.（関係が）薄い、などの意味がある。最後にゲイブリエルの意識は「かそかな」雪の音を聞きながら死者が憩う西方への旅を続け、その意識はゆっくりと遠のいていく。Distant Music は、「かそかな」あるいは「はるかな」、あるいは現時点のゲイブリエルにとっては未だ共感の「薄い」音楽という意味であろうか。それは死者からのささやきであろうか。しかしゲイブリエルの耳には聞こえているようで聞こえていない。そのささやきが本当に聞こえるのは生者と死者を結びつける「かそかな」雪の音を聞く最後のシーンにおいてであり、これはその予兆であろう。また、妻の姿を見て "a woman" と称するのは、妻は自分だけのものと今まで過信していたが、実際はそうではなく、妻には自分の知らない清らかな恋があったことを思い知らされる最後のクライマックス・シーンのやはり予兆ではなかろうか。つまり distant relationship（薄い関係）を表しているのであろうか。「オーグリムの乙女」のオーグリムは、アイルランドのゴールウエイ地方にある小さな寒村。地主との間に生まれた赤ん坊を抱いて雨に打たれながら地主に認知を求めたが受け入れられず死に至る薄幸な娘を歌ったバラードである。この歌をよく口にしていたマイケル・フューリーは、やはり雨に打たれながらグレタに最後の別れを告げる。最後に、薄れゆく意識の中で死者の憩う西方へ生者ゲイブリエルを誘う雪は、アレンの沼地に、シャノン河の荒波に落ちて水となってその役目を終える。雪は生と死を

結ぶ存在で、水（雨）は死そのものを象徴する。

上記引用文中、「暗闇」や「影」を表す語がひんぱんに出てくる（下線部）。 dark, darkness, shadow, gloom などである。これは、“The Dead” における最後のクライマックスにあたる部分、すなわち、暗闇に降り注ぐ雪のかそかな音を聞きながら、生者であるゲイブリエルが、死者であるマイケル・フューリーの世界にいざなわれる場面の予兆であろう。また、引用文の６－７行目には、既述のように、最後の場面で連続的に重ねられる s の頭韻 (alliteration) 効果がみられる — “Gabriel was surprised at her stillness and strained his ear to listen also.” さらに、引用文中、６行目と１２行目にある “listening to something” と “a symbol of something” における “something” は、この段階では、まだゲイブリエルにははっきり理解されないが、予感される何か重要な点、すなわち、最後のクライマックスにおける「魂の死と再生」を促す存在を表しているのであろう。

４．ジョイスとハーンを結ぶ見えない縁（えにし） (Unseen Relationship between James Joyce and Lafcadio Hearn)

１９０４年は、アイルランド出身のジェイムズ・ジョイスとラフカディオ・ハーン（小泉八雲）にとって、a big year 、つまり、それぞれ違った意味での人生旅立ちの年であった。同年１０月、ジョイスはその年６月に知り合ったノラ・バーナクル（後に妻として入籍）を伴ってヨーロッパ大陸に旅立った。２２歳であった。一方ハーンは同年９月２６日来日して１４年目に５４年の生涯を閉じた。前者にとっては、新たな文学の道を切り開く出発の旅で、肉体は東の大陸に向かったが、精神は、極西の故国アイルランドの「かそけき」声音から発せられる真実を聞きながら文学修業する「西方への旅」の出発であった。事実、彼の文学はすべて故郷アイルランドのダブリンを舞台にしたものである。一方後者は、極東日本を旅人生の終の住処とする。西洋化を目指す日本で置き去りにされてゆく「かそけき」ものを大切にする日本本来の美しさを尊重してそれを世界に知らしめ、それは死後出版されたものによっても続けられた。ところで、ジョイス（ゲイブリエル）の出発を促したものが「雪花」であるのに対し、ハーンの死を見届けてあの世に送り出したものは「桜花」である。前者、つまり雪は、アイルランドでは１０年ぶりとか３０年ぶりに降るめずらしいもので、メキシコ湾から北上してくる暖流によって空気が暖められて毎日のように降る雨とは対照的である。一方、後者、桜は、１９０４年（明治３７年）９月２６日東京西大久保の自宅で狭心症によるハーンの死去に際し返り咲いた季節外れの桜花である。そして、「雪花」「桜花」ともにそれぞれジョイス（ゲイブリエル）およ

びハーン（八雲）にとって、「かそけき」声音でありながら二人の心を揺さぶり、新たな世界への旅立ちを促す。ハーンの死の前日、彼の書斎の庭にある桜の一枝が見事に返り咲いた。彼はセツ夫人に向かって「春のように暖かいので、桜おもいました。ああ、いま私の世界となりました。で、咲きました。しかし、可哀そうです。おどろいて凋みましょう」とつぶやいた。その花は２７日いっぱいだけ咲いて、夕方にはハラハラとさびしく散っていった。同時にハーンが飼っていた松虫もその声を消していた。「この桜はヘルンに可愛がられていましたから、お暇乞いを申しに咲いたのでしょう。」とセツ夫人は書き残している。ところで、その時から１４年さかのぼった１８９０年（明治２３年）４月４日金曜日、ハーンは最初に日本の土を踏んだ。彼が降り立ったのは横浜埠頭であった。彼は人力車に乗って横浜の街中を通り抜け、さながら小妖精の国にでもいるような錯覚を覚える。やがて野毛山で満開の桜を見たハーンは、樹木があまりにも妖しい美しさを持つことに魅了され、この国では樹木は遠い昔から人によくいたわり愛されてきたので、ついには樹木にも魂が入って、ちょうど愛された女性がするように、樹木も人のため一層美しくよそおうのであろうか、といった空想にふけるのである。かくしてハーンもジョイス（ゲイブリエル）もそれぞれ「桜花」と「雪花」に魂の存在を認めるのである。

ハーンは、その著 *Glimpses of Unfamiliar Japan*（『知られざる日本の面影』）中の随筆 "In a Japanese Garden"（「日本の庭にて」）の最後に、「魂を宿す万物は、鉄道や工場の建設などで、ここ松江だけでなく、日本中から消え、昔ながらの安らぎと趣が無くなるだろう」（"Not from here alone, but from all the land the ancient peace and the ancient charm seem doomed to pass away."）と予言し、仏教の経文の一節を引用している —「草も木も、また岩も石も、まことにすべてが涅槃に入るべし」（"*Verily, even plants and trees, rocks and stones, all shall enter into nirvana*."）（Lafcadio Hearn: *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Carles E. Tuttle Co.P.384)。涅槃（ねはん）の原義は「吹き消すこと」。苦痛、苦悩、世俗の脱却または忘却（の境地または場所）。

ジョイスとハーンの間に直接間接にしろ交流があったという証拠はない。しかし最も大事なことは、アイルランドの祖ケルト民族と日本民族との間には魂の領域において密接な共通性があるということである。ケルト美術研究家の鶴岡真弓さんが対談の中で、長く文字を持たず、「語り」を伝統とするケルト文化について語っている。「話し言葉というすぐ消えてしまう伝達方法により、散っていて小さくて、かそけきもので細いもの、そういうものを大事にしてきた、だからこそ、よく伝わっていったものがあるというのを現在に証明しているのではないでしょうか。小さいとか可愛いというのは、美しいということと殆ど同義で、それは、ケルト人と日本人が共有する美学であります」。（鶴岡

真弓『CARA』第５号、ケルト会 in 九州（現日本ケルト協会）発行、１９８８）

ところで、平成３年１月元旦、熊日新聞紙上に、石牟礼道子さん（水俣病の苦しみに対峙し、文学作品を発表）とラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の曾孫小泉凡さんによる新春対談が掲載された。その中で、石牟礼さんは、ハーン（八雲）のことを「かそけきものの声に耳傾けた人」と言っている。ハーンがその文学あるいは民俗学的研究において、常に女性、子供あるいは小さな虫のような存在に心を向けたことは、幼い時に母親から引き離された孤独感からくるばかりでなく、こうしたケルト的感性からくるのは間違いない。石牟礼さんは言う。「八雲には生きるものたちの、また死せるものたちの、かそかな息遣いや気配に呼吸を合わせ、交信していたようなところがありましたね。..... 八雲はそんなかそかな命の世界から遣わされてきた人ではないかと、時折思えます」。（平成３年（１９９１年）１月１日、熊本日日新聞、石牟礼道子・小泉凡新春対談）

第６５回読売文学賞が、２０１４年２月１日（土）、読売新聞紙上に発表された。選ばれた６部門の作品の中に、随筆・紀行賞として選ばれた栩木（とちぎ）伸明『アイルランドモノ語り』（みすず書房、２０１３）がある。２０１４年２月５日の読売新聞紙上で、著者は、アイルランドに伝わる一つのことわざを紹介している。「小声で語られることばにひとは聞き耳を立てる」。悪いうわさが気になる、といった負の意味にもとれる言葉だが、著者は言う。「僕は思うんです。小さな声で語られるのは、伝えられるべき真実で、それは世界の片隅で語られているという意味だと」。著者の栩木さんは、２００９年から１年間、研究休暇でダブリンに滞在した際に手に入れた「モノ」の“ささやき”に耳を澄まし、その“ささやき”に隠れた真実を求めて、その声が伝えるアイルランドの風土や精神、魅力に迫った。

アイルランドにいると不思議な感覚におそわれる時がある。今自分が佇んでいる場所、見ている風景が現実のものでなく、何か「かそかな」「ささやき」が聞こえ、異界に連れてこられた感覚を覚える。栩木さんのように、愛すべきささやかなモノたちが、小声で語りはじめ、耳を澄ませばいつしか心は、彼の国の夕闇の裏路地、パブの喧騒、花咲く泥炭地や孤島の断崖へと誘われる。また、ある一瞬、日照雨（そばえ）がザーッと降って急にあがり、大空とエメラルド色の草原をつなぐ壮大な二重の虹の架け橋が出現する。その虹の両麓には「靴修理屋の妖精レプラコーン (Leprechaun) が黄金のつまった壺を隠しているよ」というささやきが聞こえてくる。峠の山道にさしかかると、突然目の前に道路標識が現れ、そこには Leprechaun Crossing（妖精レプラコーン横断中）という注意書きがなされている。

アイルランド人ジェイムズ・ジョイスもラフカディオ・ハーンも共に幼少のころから

「かそけき」「ささやき」や目に見えない霊的存在と馴染みが深かったことであろう。ジョイス（ゲイブリエル）は、「かそけき」雪の精が発する音を聞きながら、その意識は死者の住む西方の異界へと誘われ、新たな文学修業へ旅立っていく。一方ハーンは、人力車で横浜の街中をめぐりながらまるで小妖精の国に来たような感慨に浸り、野毛山の満開の桜を見て、樹木に魂が入って愛される女性のように妖しく美しく装うのだろうと想像する。ここには樹木の精、花の精、妖精に対するケルト的感性がうかがえる。そして、ハーンは季節はずれに返り咲いた桜に見送られてこの世からあの世に旅立つ。まるで桜の精に付き添われるように。

5．「己の最後を心に留めて生きる」(Living with one's last end in mind)

ヨーロッパにおける民族および文化の二大源流はローマとケルトである。前者は物事を直線的に考えていく。前へ前へと。その「負」の面は、現在の幸せと明るい未来を目論んで、発展とか開発とかをキャッチフレーズに、自意識を持って、直線的に進む点である。それは、近代以降のイギリス、アメリカ、さらに日本へと繋がってきた。一方、後者のケルトは、前者ローマに対して、螺旋的な、あるいは循環的な意識を持つ。それは、生から死に向かう人生を尊重しながらも、人生最後の死を常に心に留めて、それからひるがえって生きる道を探究する。それは、生から死、死から生への循環（サイクル）的人生観で、前者の直線的人生観と対照的である。"The Dead" の最後の場面で、主人公ゲイブリエルが経験する「覚醒」は、ジョイスのいう「エピファニー」にあたる。ジョイスは、このような瞬間的で深遠な意味をもつ精神的啓示にたいして、自分が受けたカトリック教育の伝統から借りた言葉として "epiphany"（顕現）をあてている。その「覚醒」というか、精神的啓示とは、ゲイブリエルがこれまで「几帳面」で、「臆病」で、「エゴイスティック」なセンチメンタリストとして生きてきた人生から、暗闇の中に降りしきる雪花のかそけき音にいざなわれて、自分を含めたすべての生者が死者と心を通わせ、死から生を見直して、やりなおしの人生を送る決心を促したことである。それはまさにケルト的循環の人生観である。ところで、このゲイブリエルの「覚醒」あるいは「エピファニー」に含まれる "their last end" という表現は、クリスマス・パーティの途中でのぼる話題に登場する。アイルランド南東部のメラレイ山 (Mount Melleray) にある修道院では、修道僧が「棺の中で眠る」伝統がある、という言及がある。それは、イエスにならって、娑婆の罪人が犯した罪を償おうとする修行のひとつであるが、パーティ主催者である老モーカン姉妹の姪であるメアリー・ジェイン (Mary Jane) はその理由として、"The

coffin is to remind them of their last end.” という。つまり、日々の「生」の中にある「死」（眠り）を体感し、いつか来るほんとうの「死」を覚悟する修行だと言う。これは、まさに、最後のゲイブリエルのエピファニイの予兆であろう。

ところで、日本で２００６年末から大ヒットを続けている「千の風になって」という歌は、欧米では、以前からその英語の歌詞にいろいろな曲がつけられ、例えば、アメリカの９．１１無差別テロ犠牲者追悼式などで歌われてきた。日本では、新井満さんが日本語に訳し、曲をつけて、テノール歌手の秋川雅史さんが歌ってきた。ところで、この歌詞の原作者はいまだにわかっていない。一説によると、アイルランド人の先祖であるケルト人のドルイド詩人によって作られ、１９世紀、アイルランド人が主食のジャガイモ飢饉から逃れてアメリカに移民した折、その英語版をもたらしたらしい。Áine Minogue というアイルランドの女性歌手が歌う *Do Not Stand* という哀歌の歌詞と筆者の拙訳をここに引用する。

Do Not Stand by Áine Minogue

Do not stand at my grave and weep.	私の墓の前で泣かないでください。
I am not there. I do not sleep.	私はそこにはいません。眠ってなんかいません。
Do not stand at my grave and sigh.	私の墓の前で嘆かないでください。
I am not there. Do not cry.	私はそこにいません。泣かないでください。
I am a thousand winds that swiftly blow.	私は一千もの疾風となり、
I am the diamond glint on newly fallen snow.	私はダイアモンドのように輝く新雪になり、
I am the sunlight on ripened grain.	私は実った穀粒に降りかかる日の光となり、
I am the soft and gentle autumn rain.	私はやさしくそぼ降る秋雨となります。
Do not stand at my grave and weep.	私の墓の前で泣かないでください。
I am not there. I do not sleep.	私はそこにはいません。眠ってなんかいません。

Do not stand at my grave and sigh.	私の墓の前で嘆かないでください。
I am not there. Do not cry.	私はそこにはいません。泣かないでください。
When you wake from sleep in the early morning hush,	あなたが朝のしじまから目覚める時、
I'm the swift uplifting rush	私は疾風のごとく飛翔する翼となり、
Of quiet birds in circling flight.	やがて鳥たちをおだやかに空中で旋回させます。
I am the soft starlight at night.	私はおだやかに輝く星灯りになります。
Do not stand at my grave and weep.	私の墓の前で泣かないでください。
I am not there. I do not sleep.	私はそこにはいません。眠ってなんかいません。
Do not stand at my grave and sigh.	私の墓の前で嘆かないでください。
I am not there. Do not cry.	私はそこにはいません。泣かないでください。
Do not stand at my grave and sigh.	私の墓の前で嘆かないでください。
I am not there. Do not cry.	私はそこにはいません。泣かないでください。

ケルト時代からアイルランドに言い伝えられてきた諺のような決まり文句がある。それは、「生きることは別れること、別れることは生きること」ということばである。アイルランド人は昔から子だくさんで、『アンジェラの灰』という映画に描かれているように、生まれたばかりの赤ん坊が次々に死ぬということは日常茶飯事であった。また、主食のジャガイモの種芋が病気で腐って、１８４５年から２年間で１００万人が餓死し、生き延びていくために年間１００万人単位でアメリカやオーストラリアなど、二度と戻れぬ遠い土地へ移民して、彼らにとってまさに「生きることは別れること、別れることは生きること」であった。そして、彼らが「別れ」に打ち勝つ「サバイバルスキル」は、思いっきり泣き、同時に思いっきり歌うことであった。Lamentation, すなわち「哀歌」は、他

国では絶対にありえない三日がかりで行われる葬式で歌われ続けてきた。歌は、悲しみを癒し、つらさを乗り越えて前に進み出る原動力となった。またこれも他国では絶対にありえないことだが、アイルランドで広く読まれる新聞、いわゆる全国紙のページを開いてすぐ２ページめが死亡欄で、そこには有名人でなくても、ごく普通の亡くなった人の葬式がどこで何時に行われるかが記され、それは生前まったく面識がなかった人が亡くなった場合でも、葬儀に参加するのがアイルランドでは自由であること、むしろそれが歓迎されるということを意味している。筆者自身、アイルランド人の友人に誘われて見ず知らずの人の葬儀に不謹慎とは思いながら列席したことがある。

アイルランドに５世紀キリスト教を伝えたのは、ケルト人の聖パトリックだが、彼はケルトのドルイド教と新しいキリスト教の共通するところを強調して説き、以後、西ヨーロッパの中で唯一二つの宗教が共存する国となった。その中で最も重大な共通点は、「死と復活（よみがえり）」の考え方である。ケルトのドルイド教の考え方では、「死」は「眠り」と同じで、「眠り」は必ず「覚める」ように、「死」は必ず「よみがえり」を約束する。キリスト教では、人類の始祖であるアダムの神に対する反逆により、その罪に対する罰として「死」の棘が課せられた。そして、神はイエスという人間の姿を取ってこの地上に生まれ、人類の罪の償いとして十字架につき、そして復活された。このイエスの復活により、人類も永遠の命にあずかることとなった。ケルトの「千の風になって」である *Do Not Stand* では、「私は死んで墓の中に眠っているのではなく、風となり、雪となり、日の光となり、雨となり、星になって、貴方たちを見守っている」と言って、死者が生者にメッセージを送っている。自然と共存し、自然の中に聖霊を認めるケルトの伝統的な考え方を反映して、死者は自然の一部となって生き続けるのである。

ジョイスの文学をはじめ、アイルランド文学の最大の特徴は、我々の人生が、生きている人たちと同じく、死んだ人たちに囲まれて生きているのだということを感じさせてやまないという点である。

6.「暗闇の思想」(Thought of Darkness)

“The Dead” の主人公ゲイブリエルは、階段の暗がり (shadow, darkness) に佇んで思いにふける妻グレタの姿を見て、自分が画家だったら、妻の姿態を絵に描いて、それを *Distant Music*（はるかな、かそけき音楽）と名付けようと思う。その後、ホテルの部屋に入ったゲイブリエルは、妻から「あたしのために死んだ」かっての恋人との思い出を告白され、泣き疲れてベッドに横たわる妻の子供のような寝顔を見、そして、暗闇に降りしきる雪花のかそけき音を聞きながら、死者の世界へいざなわれ、魂の「覚醒」

(epiphany) を体験する。この最後の場面の直前、妻の寝顔を見ながらゲイブリエルは心の中で呟く。

> Poor Aunt Julia! She, too, would soon be a shade with the shade of Patrick Morkan and his horse. He had caught that haggard look upon her face for a moment when she was singing *Arrayed for the Bridal*. Soon, perhaps, he would be sitting in that same drawing-room, dressed in black, his silk hat on his knees.....One by one, they were all becoming shades. Better pass boldly into that other world, in the full glory of some passion, than fade and wither dismally with age. (*Dubliners*, PP.254-255, 下線は筆者による)
> (かわいそうなジューリア叔母さん！　彼女も遠からずパトリック・モーカンとその馬の亡霊のところへ亡霊となってゆくことになるだろう。「婚礼の装い」を歌うやつれたその顔を自分は一瞬みとめていた。多分、間もなく、自分は、あの同じ客間に、喪服を着て、膝の上にシルク・ハットを置いて、腰かけているだろう。・・・・・一人ひとり、みな亡霊になってゆく。齢と共に、陰惨にあせ衰えてゆくよりは、何か熱情で誇りに満ちて、敢然と彼岸の世界へ赴く方がましだ。)

パーティの余興に、未婚で老齢のジューリア叔母さんが「婚礼の装い」(*Arrayed for the Bridal*) を懸命に歌った。あの時の頬がやせこけた顔つきを思い出して、自分が叔母の葬儀に参列するのはもうすぐだろうと主人公は心の中で呟く。上記の引用箇所には "shade" という語（下線部）が３か所あらわれる。"shadow" と同じ「影」という意味とともに「亡霊」(ghost) という意味がある。階段に佇む妻をおおう "shadow"（影、暗闇）とともに、この "shade" は、最後の死者 (ghost) の世界へ主人公をいざなう "darkness"（暗闇）と「かそけき雪の音」への予兆であり、この作品全体のキーワードの一つであろう。

１９７２年１２月１６日の朝日新聞西部本社版夕刊文化面に豊前火力発電所建設反対運動の思想的な根拠として、松下竜一氏が「暗闇の思想」という一文を寄稿した。その中で松下氏は「今でも自分には深々と想い起してなつかしい暗闇がある」と言い、それは１０年前の１９６２年に亡くなった友と共有した暗闇で、友は極貧のため電気料を滞納した果てに送電を止められていたが、夜ごと自分はこの病友を訪ねて、暗闇の枕元で語り合ったということである。友は「電気を失って、本当の星空の美しさがわかるようになった」と語り、暗闇の底で、自分たちは虚飾なく青春の思いを深め、暗闇にひそむ

ということが、何か思惟を根源的な方向へ鎮めていく気がしたが、暗闇にひそんでの思惟が今ほど必要な時はないのではないかと考え始めた、とある。さらに、「誰かの健康を害してしか成り立たぬような文化生活であるならば、その文化生活をこそ問い直さなければならない」と述べ、いわば発展とか開発とかが、明るい未来をひらく都会志向のキャッチフレーズで宣伝されるなら、それとは逆方向の、むしろふるさとへの回帰、村の暗がりをもなつかしいとする反開発志向があってしかるべきで、その奥底には「暗闇の思想」があらねばなるまい、としている。

映画監督の大林宣彦氏の作品に「なごり雪」がある。大分県臼杵市を離れて２８年たった主人公梶村（三浦友和）は、高校時代の親友である水田（ベンガル）から電話を受ける。水田の妻の雪子が危篤だという。臼杵に帰った梶村を、故郷の臼杵は優しく包み込むように迎える。そして、水田と雪子と過ごした青春の日々を思い出す。親友の水田は「何も変わらんだろう、臼杵の街は。どんどん変わっていくのもいいが、こうして変わらんものもいい」と語る。この映画は、１９７４年に伊勢正三作詞作曲で発表され、７5年にイルカによるカバー曲が大ヒットした歌を大林監督が映画化したものである。大林監督はこの映画をきっかけに、新潟県長岡市の「この空の花 ― 長岡花火物語」（１２年）、北海道芦別市の「野のななのか」（１４年）といった、その土地の歴史や伝統を題材にした「古里映画」作りを始めた。監督は「街灯がなくて恥ずかしがっていた地方が、星がきれいに見えるというように見方がかわってきた。かっては『負』だったものを文化として再評価する機運が出てきているように思えます」と語る。（讀賣新聞、２０１４年１１月９日、「よみほっと日曜版」より）

２０１４年１０月３０日（木）２２時～２２時５５分、NHK総合テレビ番組「地球イチバン ― 世界一の星空がくれたもの・アイルランド ～ 息子の一言が４０００個の星を生んだ ～」が放映された。アイルランドの南西にあるアイベラ半島（Iveragh Peninsula, 通称リング・オブ・ケリー・Ring of Kerry）の突端「デリナーン」(Derrynane) の村では、肉眼で見られる星の数が日本の郊外の約１０倍の４０００個にのぼる。このため、世界最高のゴールド認定の Gold Tier Award (tier はレベルを示す) を受賞した。ここまで至るには、ケリー・ダークスカイ・グループ (Kerry Dark-sky Group) の並々ならぬ努力があった。女性のジュリー・オーモンドさんが、この星の守りをするグループを立ち上げた。ジュリーさんをリーダーとして、職人やバーテンダーなどがボランティアとして参画している。ジュリーさんは、１７年前首都ダブリンからここに移転して、５人の子供を育ててきたが、引っ越して数日後、泥炭を取ってくるように言いつけた９歳の息子が、間もなく走って帰ってきて、「ママ、来て！」「ママ、見て！星を！」と

大声で叫ぶので空を見上げたら、真っ黒な空が満天の星に満ちていた。それがきっかけで、灯りを一つ消すと十個の星が見える、この暗さにこそ価値があると気づき、村中の灯りを点検し、灯りが拡散しないよう、例えば外の電灯を下向きにし、上部にカバーを付けるよう説得してまわった。また、新たな電気工事では、電球よりも長持ちする LED 電球に替えた。ケリー・ダークスカイ・グループの一人ポリック・サンズさん（４９）は、かって北アイルランドに住んでいたが、紛争のため、幼い娘を守るため、両親を残したままこの地に移ってきた。星空を見るたびに北アイルランドに残してきた年老いた両親を思い遣る。友人や愛しい人を想う時、星でつながっている、と言う。夢は、庭の小屋に車輪を付けて移動式の天文台を造ることである。ヴィンセント・ハイランドさん（５３）は、ダブリンでコンピューター関係の仕事に携わっていたが、日々あくせく働くことに嫌気がさし、同僚が自殺した衝撃もあって、２０００年２月会社を辞めてこの地に移ってきた。彼は灯りが生き物に及ぼす影響について研究しているが、暗闇に身を置くと、生き物の気配を近くに感じ、孤独を感じない。満天の星空を見上げながら彼は言う、「これがあるから生きている。家族や死んだ父とともに生きている。人生の事が少しわかってくると、シンプルなものに戻っていく。亡き父が言っていた。人生でベストなものは無料だ」。デリナーンの村の沖合にスケリグマックヒールという絶海の孤島がある。６世紀の石造りの修道院跡があり、今は誰も住んではいない。代わりに渡り鳥が棲みついている。その一つであるパフィン（puffin, ニシノツノメドリ）は、まわりに光があると方向感覚を失い、巣に帰れず、死んでしまう。ところで、アイベラ半島の人々は、昔から天体とかかわって生きてきた。太陽の動きに合わせて並べられた立石。それは時間の経過を知らせる。また、５０００年前の岩に彫られた図が天体の動きを示し、種まき、刈り入れ時を知らせる。アイベラ半島にはこのような岩が１００個もあり、太古の人々がいつも美しい星に誘われた充実した人生を送っていたことが想像できる。さて、最後に登場するのは、ケリー・ダークスカイ・グループの一人、バーテンダーのマイケル・シーハンさん（６４）である。彼はグループ活動で写真を担当している。中心メンバーの中で唯一ここで生まれてずっとここで生きてきた。シャイで勤勉で、仕事一筋に生きてきた。１９６７年から４７年間パブで働いてきた。仕事を終えて家に帰る時にいつも星空を見上げて思う。「人生は仕事がすべてじゃない。あの星空の彼方に何かがある」。ここデリナーンでは、１９６３年まで電気がなかった。でも、電気がつくと、石油ランプによる影のゆらぎが消えて、さびしかった。子供の時、影を見て、何かがある、何であるのかと考えていた。今再び取り戻しつつある暗闇。マイケルさんも喜びを取り戻しつつある。去年１１月２２日、太陽が昇る直前、家の前の畑で撮影した星空の写真。流れ星が偶然映っ

た。今日も流れ星を奇跡的に見つけられるかも。マイケルさん「星を見上げてなかったら、これほど充実した人生は過ごせなかっただろう。大宇宙の中で私たちは小さな存在だ」。この番組の旅人役をつとめた俳優の高橋光臣さんは旅の終わりで言う。「自分の身近にある大切なものに心が向かい始めました」。

7. 人生に希望を抱かせてくれた幽霊(Ghosts which made the aspirational in life)

前述の通り、栩木伸明さんは、アイルランドにおけるゴーストリィな「ささやき」に隠れた真実を探し求めた。ハーン（八雲）は、１８９３年（明治２６年）１０月１１日に、日本滞在では先輩にあたる英国人の学者バジル・ホール・チェンバレンに宛てて次のような手紙（一部）を書き送った。これは将来の日本を杞憂するハーンの挽歌というか遺言のようなものであった。

> What made the aspirational in life? Ghosts. Some were called gods, some demons, some angels; they changed the world for man — they gave him courage and purpose and the awe of Nature that slowly changed into love; they filled all things with a sense and motion of invisible life; they made both terror and beauty.
>
> There are no ghosts, no angels and demons and gods: all are dead. The world of electricity, steam, mathematics, is blank and cold and void. (Louis Allen & Jean Wilson ed., *Lafcadio Hearn: Japan's Great Interpreter ～ A New Anthology of His Writings: 1894-1904,* Japan Library Ltd.,1992)
>
> (何が人生に希望を抱かせてくれたのでしょうか。幽霊です。その一部は神とも呼ばれ、また悪魔、天使とも呼ばれていました。彼らこそが人の為にこの世の有様を変えてくれたのです。彼らこそが人に勇気と目的を与えていたのです。自然への畏敬を教え、それはやがて愛に変わった。彼らこそが見えざる万物を生命の感覚と活動とで満たしていた。彼らこそが恐怖と美を造り上げていたのです。もはや幽霊も天使も悪魔も神々もいません。すべて死に絶えてしまいました。電気と蒸気と数字の世界は虚しく、冷たく、空っぽです。)

ハーン（八雲）の曾孫小泉凡さんは、このハーンの手紙の内容と同じようなことを言っている。「異界は生きる目的を与えてくれると同時に、人間が自然を畏怖しなければいけないことを教えてくれます。だからゴーストの世界は必要なんだということを八雲は言っているんですが、アリエッティの世界もそうだと思うんですね。人間がすべてをコントロールしていいんだっていうのではなくて、異界を畏怖するというか、もう一つの世界に気を遣うというか、それによって人間が謙虚さを失わないということを教えてくれるような気がするんです。（アニメーション映画『借りぐらしのアリエッティ』封切りに際しての特別インタビューで。カルチャーニュースサイト・CINRA（シンラ）、２０１０年７月２３日）

８．おわりに

ジェイムズ・ジョイスの「死せる人たち」（"The Dead"）を主要な拠り所として論をすすめてきたが、主人公ゲイブリエル・コンロイが最後に経験する精神的啓示、つまりepiphany（エピファニー）は、暗闇の中で、アイルランドでは３０年ぶりに降りしきる雪花のかそけき音に誘われて、死者が眠る西方に心を通わせ、死から生を見直して人生をやり直す決心をする、「魂の死と再生」の時の訪れであった。それは「ケルト的アイルランド性」の顕著な特徴を示すものである。ジョイスも日本人小泉八雲になったラフカディオ・ハーンも、同じケルトの血を引くアイルランド人として、「暗闇」に聞こえる「かそけき囁き」や目に見えないghostlyな霊的存在に幼時から敏感に反応した。

この特徴は、本来、極西の地アイルランドから最も遠く離れた極東の地日本のものでもある。「暗闇の思想」を新聞に投稿した松下竜一氏は、「暗闇にひそむということが、何か思惟を根源的な方向へ鎮めていく気がしたが、暗闇にひそんでの思惟が今ほど必要な時はないのではないか」と述べ、さらに「誰かの健康を害してしか成り立たぬような文化生活は、今こそ問い直さなければならない」とし、これは、発展、開発を旗印にして推し進められてきた原子力発電が現在もたらしている生命の危機にわれわれの意識を向けさせる。

一方、２０１４年１０月３０日（木）、NHK総合テレビで放映されたシリーズ番組「地球イチバン」では、暗黒の夜空に４０００個の満天の星が見えるアイルランド南西アイベラ半島の寒村「デリナーン」(Derrynane) が取り上げられた。満天の星が見えるのは、村中が協力して外の電灯の明かりが拡散しないようにした結果である。暗闇に身を置くと、生き物の気配を身近に感じて孤独感をもたないし、星空を見上げれば、遠くにいる愛しい人や亡き人とつながって生きていられる、と村人たちは言う。

ところで、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は友人に遺言ともいえる手紙を送った。「人生に希望を抱かせてくれたものは幽霊ですが、今や死に絶えてしまい、電気と蒸気と数字の世界は虚しく、冷たく、空っぽです」と書いた。

われわれは、明々とした光に導かれて歩くと道に迷う心配はない。しかし、その場合は、自分の目や耳や脳の力を働かせることは乏しく、周りにいる他の存在に無頓着になることが多い。一方、暗闇に身を置くと、神経が研ぎ澄まされ、あたりに潜む生物などの気配を感じ、通常は見えない、あるいは聞こえない存在を知覚し、まわりの風景や道の輪郭が次第に見えてくるものである。

陽が昇り、進歩の理念をかかげる東方（ヨーロッパ大陸）ばかりに心を傾け、生を謳歌することに過剰な自意識を持ち続けてきたゲイブリエルが妻の告白を聞き、暗闇に「かそけく」降り続ける雪音を聞きながら、“The time had come for him to set out on his journey westward.” と心の中で呟き、己の魂の死と再生のエピファニーを経験する。

「暗闇」こそ、松下竜一氏の言うように「思惟を根源的な方向へ鎮めていく」ものであり、ジョイスもハーンもアイルランド人として共有していた観念であったと考えられる。

引用＆参考文献

1. Allen, Louis & Wilson, Jean ed. : *Lafcadio Hearn: Japan's Great Interpreter ～ A New Anthology of His Writings: 1894 ～ 1904*, Japan Library Ltd., Sandgate, 1992.
2. Hearn, Lafcadio: *Glimpses of Unfamiliar Japan*, Charles E. Tuttle Co., Tokyo, 1993.
3. 石牟礼道子：小泉凡との新春対談、熊本日日新聞、熊本、１９９１年1月１日．
4. Joyce, James: *Dubliners*, A Tiad Grafton Book, London, 1988.
5. 小泉　凡：『借りぐらしのアリエッティ』封切りに際しての特別インタビュー、カルチャーニュースサイト・CINRA（シンラ）、２０１０年7月２３日．
6. 松下竜一：「暗闇の思想」、朝日新聞西部本社版夕刊文化面、１９７２年１２月１６日．
7. Minogue, Áine (singer) : “Do Not Stand” in *Celtic Lamentations*, Sounds True, 2005.
8. 栩木伸明：『アイルランドモノ語り』、みすず書房、東京、２０１３．
9. 鶴岡真弓：『CARA』第５号、ケルト会 in 九州（現日本ケルト協会）、福岡、１９８８．
10. 役所広司（ナビゲーター）＆ 高橋光臣（旅人）：「地球イチバン ―　世界一の星空

がくれたもの・アイルランド ～ 息子の一言が４０００個の星を生んだ ～」、NHK 総合テレビ番組、２０１４年１０月３０日２２時～２２時５５分．

１１．福永聖二（文）＆ 中原正純（写真）:「よみほっと日曜版」、讀賣新聞、２０１４年１１月９日．